

私と天文学 (III)

手塚治虫 (漫画家)

昨年、惑星科学の松井孝典氏にポエジャーが発見した土星のいろいろな情報を教えていただき、その神秘さに感動するとともに、土星に対する少年時代の憧れと思い出が蘇って来て、ひとしお懐しかった。

土星の輪を望遠鏡で観ることが、天文ファンのぼくの夢だった。「子供の科学」「科学画報」の販売代理部からレンズを買って、手製の望遠鏡をつくり、宵闇を待ちかねて空へ向けた。だが月のクレーターはまだしも、恒星はおろか火星や水星まで、色収差で、青赤緑に分裂して、3つにだぶって見えるのがおちであった。ましてや土星の輪などはとんでもない。結局、何回望遠鏡をつくっても、せいぜい鳥を越した向うの長屋の二階を覗き見するていどのことで終わってしまった。

当時、土星の輪は一般の常識では、帽子のツバのような1枚の円盤ということになっていて、漫画でも、よくその上に宇宙人や探検隊が乗って歩いたりする絵があった。しかし天文ファンは、それが細かい星の集合体なのだということをちゃんと知っていて、ラプラスの星雲説などと結びつけて太陽系の起源のモデルなのだとかぶりに話し合ったりしていた。

しかし、それがたった300~400メートルの厚さしかない氷の粒の帯だということを知った時、あらたなイメージを想起せねばならなかった。今世紀ほど宇宙の情報が矢次早にイメージを覆えた時代はあるまい。学説がひっくり返ったりするのだから、末端にいる画家のわれわれなんかは、その都度新しい情報をもとに新しく画像や

映像を描き直さなければならない。最新情報による宇宙画でも10年もたつと古さで使いものにならなくなってしまふのである。

終戦前後、ぼくはC・ボーンステルの宇宙画に憧れ、その迫真力とスケールに肝をつぶし、宇宙の情景に夢を走らせた。だが、その絵すらもう4昔も前となると新発見のために価値がかすんでしまった。ボーンステル氏は90歳近くになり、数年前友人のO君が訪ねて行った時、氏のアトリエにはポエジャーからの写真が壁中にはられ、「死ぬまでに、ポエジャーによる土星の世界を、きっと絵にしてみせるよ」と張り切っていたそうである。

しかし、それすらもいずれ古色蒼然となり一切が塗りかえられるだろう。人類の叡智をもってしても、この塗りかえは永久に続くものと思われる。

☆ ☆ ☆

◇ 3月の天文暦 ◇

日	時	記	事
2	20	月	最遠
3	4	朔	
5	18	啓	蟹 (太陽黄経 345°)
9	3	水	星 外合
11	3	上	弦
17	6	月	最近
17	19	望	
18	15	天王星	留
20	19	春	分 (太陽黄経 0°)
24	17	下	弦
30	1	月	最遠

◇ 3月の日月惑星運行図 ◇

